もっと知りたい ふるさと 65

「雨宮之渡」詩碑建立始末記

私が詩吟を始めたのは当地に「鞭馨粛々」の碑文があったからです。

昭和52年、田澤徳郎氏を会長に「第47岳風会雨宮吟同会」が発足し、私は平成11年十段位を取得することが出来ました。

頼山陽（1780～1832）の「題不識庵撃機山図」は、詩吟の中で最も重要視されている漢詩です。

岳風流では、吟詠はすべて暗記して吟ずる厳格な決まりがあります。特にこの詩は、雨宮を生地とし、当吟同会では、「雨宮之渡」の歴史と碑文建立等の経緯を調べ吟詠に生かしてきました。後文はその時の記録です。

戦前の海軍大学校では、必ず年中行事として「戦国時代の戦跡」の現地見学をしていました。昭和11年11月、海軍大学校海軍少佐の高松宮殿下が一行と共に川中島古戦場を踏査されました。見学コースはいつも決まっていましたが、この時は変更されて妻女山に登り、古い参道を長尾根越えで土口に下られました。

連絡を受けた当時の雨宮縣村の安藤晴美村長と柳沢和恵校長が正装して急ぎ土口坂の展望所で殿下をお迎えしました。迎えた二人にお気軽に地図を片手に「雨宮之渡」の所在を尋ねられました。

村長は眼下の千曲川を示し、川中島合戦当時は約2㌔南方、現在の県社である雨宮坐日吉神社の杜付近と伝えられていると指し示しました。

関係者のなかでは、詩碑建立の想いはありましたが、当時の農村は不況で、繭1貫目（3.75㌔）2円50銭という安価で厳しい状況下でした。

殿下が来られたことがきっかけとなり、「鞭馨粛々」を詠んだ江戸時代の詩人頼山陽直筆の書を刻んで、詩碑を建立しようと地元有志の機運が大きく高まりました。

山陽は安芸藩（広島）浅野家藩士で才高く学博で史論縦横、熱烈な上杉びいきでありました。京都で家塾を開き、そこで、「不識庵機山を撃つの図に題す」を作ってから今まで約二百有余年の歳月が流れております。※注

その詩の冒頭で有名な「鞭馨粛々」は最も人々に親しまれており、詩はいきいきして天真流路躍如として、後世の維新の志士や青少年の血を湧かせ、士気を鼓舞したことは周知のことです。

山陽の子孫の所在を広島市に照会したところ、曾孫の文学士頼成一氏が昭和12年まで広島市に在住していました。しかし当時は、東京日比谷図書館の要職にある旨連絡をいただき、早速、頼成一氏に「鞭馨粛々」直筆の所在について、丁重に伺いました。

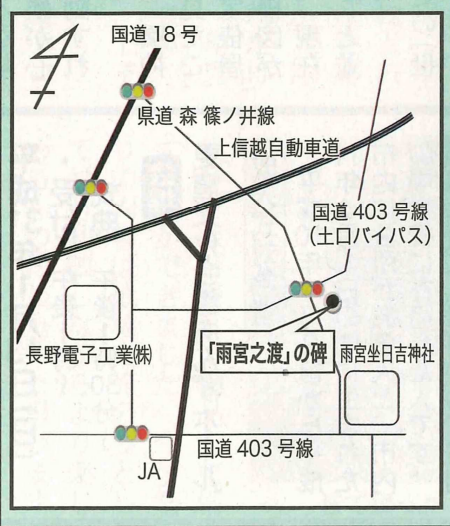
早々に、頼成一氏から「昨年、西日本熊本県天草で、曾祖父頼山陽の『泊天草洋』の『雲か山か呉か越か』の詩碑が建立されており、この度、東日本信州の川中島に『鞭馨粛々』の詩碑を建立されることは、血のつながる者として真に感銘に堪えません。ご照会の直筆は、山形県米沢の上杉伯爵家と東京長尾家と大阪有田家所蔵の三幅だけで、他は偽物が多く出回っていますが、自宅には遺墨が何も残っておりません。なお、署名は上杉家の軸は『のぼる』の実名に改まっています」との返書をいただきました。

また、長尾家の軸は「山陽外史」の雅号で、最も躍動した会心の筆との添え書きもありました。

早速、長尾家秘蔵の軸物の撮影の許可をいただき、詩碑は皇紀2600年（昭和15年）12月、雨宮の地に建立されました。翌春、杏花爛漫の日、詩碑の除幕式が盛大に執り行われました。詩碑建立の建設資金は雨宮区民1戸平均50銭及び有志の浄財によって賄われました。

なお、「雨宮之渡」の題字は、海軍中将正四位勲二等小林宗之助氏により書かれました。

※注　不識庵は上杉謙信で、機山は武田信玄

半田裕美

「雨宮之渡」の碑